

令和7年度 貝塚市立中央小学校 研究の取組み

学校教育目標

認め合い・伝え合い・高め合い

研究テーマ

自分の言葉で話せ、友だちの考えも聞ける子をはぐくむ

1. 研究テーマ設定の理由

本校では、学校教育目標として「認め合い・伝え合い・高め合い」を掲げています。この目標を実現するために、学習の中で、自分の言葉で相手に伝える力と、相手の考えをしっかりと聞く力が必要です。

国語科において、本校の児童は「文章構成をつかむ」「筆者の主張を読み取る」「要旨をまとめる」といった活動に取り組んでおり、「初め・中・終わり」のまとまりを理解したり、段落を要約したりすることはできてきています。しかし、友だちと意見交流を行い、自分の考えを広げたり、深めたりする対話的な活動を苦手とする児童が多く見られます。

また、現代社会では、他者と協働しながら課題を解決していく力がこれまで以上に求められています。多様な価値観を認め合い、相手の考えを尊重し、自分の意見を的確に伝える力は、これからの社会を生き抜く上で、子どもたちにとって欠かすことのできない力になっています。

こうした力をはぐくむには、日々の授業の中で「話す」「聞く」を大切にし、子どもたち自身が自らの言葉で表現し、友だちの意見に耳を傾ける場面を丁寧に積み重ねていくことが重要です。

これらをふまえ、「自分の言葉で話せ、友だちの考えも聞ける子をはぐくむ」という研究テーマを設定し、言語活動を核とした授業改善に取り組むことにしました。

2. 言語能力をはぐくむモデル校として

令和 7 年度は「言語能力をはぐくむモデル校」に指定され、言語能力の育成に焦点を当てて、研究を進めることとしました。大きな取り組みとして、2点あります。1点目は、「国語科を要として、どの教科においても、言語能力をはぐくむという視点をもって授業改善を行うこと」。2点目は、「国語科で並行読書を取り入れた学習活動をおこなったり、読書の機会を設定したりすることで、子どもの読書量を増やすということ」です。

3. 研究内容

- ・ペアトークやグループでの話し合い活動を通じて、児童が自分の考えを広げる。
- ・国語科では、「単元を貫く言語活動」を設定し、子どもが見通しをもって学習できるようにする。
- ・並行読書を取り入れた学習活動を導入し、児童が読書を通して、意見交流を行う機会をつくる。

4. 研究方法

各学年で研究授業を位置付け、国語科を中心として、各教科で言語活動を通して、どのような深まりにつながるかを検討しました。特に、ペアトークやグループワークなどの言語活動が思考の深化にどう結びつくかに注目しまし

た。

事前研修会では、事前授業の様子を録画したものをもとに、児童が話し合いを通してどのように考えを深めているか、またそのために必要な教師の手立ては何かについて協議しました。ここでは、問い返しや板書、意見の可視化など、児童の思考を促す工夫について共有しました。

研究授業後には、校内の討議会を実施し、テーマに基づいて授業をふり返り、児童の言語活動の深まりや、課題点について共有しました。最後に、外部講師の先生よりご講評をいただき、今後に向けた改善の方向性を明確にしました。

また、国語科では、単元の中で身に付けさせたい力を意識した「単元を貫く言語活動」を設定し、単元の学習中、単元計画を教室内に掲示しておき、いつでも学習の進捗を把握できるようにしました。国語科以外の教科においても、授業の中でペアトークやグループでの話し合い活動を取り入れ、話し合うことで思考が深まったり、知識の定着につないだりできるようにしました。

さらに、並行読書を取り入れた学習活動を全学年で実施しました。特に物語文の読み深めや意見交流の中で、読書を通して他者の考えに触れ、自分の考えを言葉にする力を育てることをねらいとしました。また、図書館事務、学校司書と連携し、読書への動機付けとなるような図書館の掲示やビブリオバトルの導入にも取り組んだり、図書館の活用についての教員向けの研修を行ったりしました。

5. 研究の成果

「自分の言葉で話す」「友だちの話を聞いて考えを広げる」といった活動が増え、児童の言語的な表現力と他者との関わりに変化が見られました。

「単元を貫く言語活動」の設定により、子どもたちの見通しが明確になり、主体的な学びにつながりました。

全国学力・学習状況調査の結果において、国語は、全国平均に対しての点数が上昇しました。一方で、言語活動の成果が他教科に十分に活かされていないという課題も浮き彫りになりました。

子どもたちの読書量は増加しており、不読率は4月に比べ、10月時点で約11%低下し、図書館の貸し出し冊数は、昨年度の約2倍になりました

6. まとめ

本校では、「自分の言葉で話せ、友だちの考えも聞ける子をはぐくむ」という研究テーマのもと、言語活動を核とした授業改善に取り組んできました。国語科を要としながら、すべての教科において児童の言語能力の育成を意識し、ペアトークやグループ活動、並行読書などの対話的な学びを授業の中に位置づけました。

その結果、子どもたちの言語表現力や学びに対する主体性に変化が見られ、学力調査の結果や読書活動の定着にも一定の成果があらわれています。とりわけ、学びのプロセスにおいて「自分の考えをもち、それを他者と共有し、考えを深めていく」姿勢が育ちつつあることは、本研究の大きな成果といえます。

しかし一方で、すべての児童が等しく思考を深められているわけではなく、話し合い活動が表面的なやり取りにとどまるケースも見受けられました。また、言語活動の成果が他教科に十分に波及していないという課題もあります。

これらの成果と課題をふまえ、今後はより効果的な言語活動の在り方と、その成果をどのように他教科に活かすかという視点をもちながら、さらに授業改善を進めていきたいと考えています。